

## 総合的な学習（探究）の時間を通じた学習意識の形成 —— 職業体験学習が及ぼす影響 ——

神戸松蔭女子学院大学 長谷川 誠

### 抄 録

本稿の目的は、現在、主に総合的な学習の時間の中で行われている職業体験学習に関する調査を実施し、職業体験学習の評価と高卒後の進学先での学びに対する考えとの関連を検討することである。その際、高校所属学科による違いに注目した。

分析、検討の結果、同じ職業体験学習の取組みであっても普通科、職業学科によって評価も違い、また、その後の進路先における学びに対する考え方にも影響を及ぼすことが確認できた他、なかでも高校、高卒後を通じた職業レリバンスの強い学びが社会への移行不安を軽減することにつながっていることも明らかとなった。

こうした視点を持つことは、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」ことを目指す総合的な探求の時間の学びと、高卒後の進学先との教育的な連動の観点から課題を見出す意味でも重要であると考ええる。

Key Words：普通科 職業学科 職業体験学習 社会への移行不安

### 1. はじめに

2000年以降、日本の教育においては、「生きる力」の形成が強調されることとなった。この生きる力は、文部科学省の1996年答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」において示された<sup>1</sup>。具体的な内容について文部科学省（2010）は、①「確かな学力」は、基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力、②「豊かな人間性」は、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、③「健

康・体力」は、たくましく生きるための健康や体力、としている<sup>2</sup>。

こうした動きの中、総合的な学習の時間は、小中学校では、1998年に新学習指導要領が告示、2002年に施行され、高等学校では、1999年の告示、2003年に施行されることとなったのである。総合的な学習の時間の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、

協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」と示されている<sup>3</sup>。

さらに2018年3月には高等学校学習指導要領の改訂が行われ、2019年度より一部を移行措置として、順次、総合的な探求の時間が実施されることとなった。新たなる総合的な探究の時間が創設させることにともない、文部科学省（2018）は総合的な学習と時間との違いについて「両者の違いは、生徒の発達の段階において求められる探究の姿と関わっており、課題と自分自身との関係で考えることができる。総合的な学習の時間は、課題を解決することで自己の生き方を考えていく学びであるのに対して、総合的な探究の時間は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」としている<sup>4</sup>。

加えて、高等学校においてこのような生徒の姿を実現していくに当たっては、生徒が取り組む探究がより洗練された質の高いものであることが求められる。質の高い探究とは、次の二つで考えることができる<sup>5</sup>。

- 1) 探究の過程が高度化するということである。高度化とは、①探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）、②探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）、③焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）、④幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）などの姿で捉えることができる。
- 2) 探究が自律的に行われるということである。具体的には、①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で

捉えることができる。

そして、生徒の発達の段階を踏まえ、高等学校の総合的な探究の時間は「自己の在り方生き方」を重視し、就職や進学を控え、現実的、实际的に検討することを迫られているなかでは「現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題なども、高等学校の生徒の発達の段階と深く関わっている」とされている<sup>6</sup>。また「このように自己の在り方生き方を考えることは、社会とのつながりを求める高校生にとっては欠かすことのできない重要な学習である。例えば、生徒一人一人が自己の希望する進路に沿った就業体験を中心として、課題の解決や探究活動を展開することが考えられる」との記述もあり<sup>7</sup>、今後は一層、総合的な探究の時間を通じて職業体験を含んだキャリア教育が組み込まれていくことが考えられる。実際に、職業体験の実施状況をみると、総合的な学習の時間の中で実施している割合は、公立中学校で78.2%、公立高校で73.7%となり<sup>8</sup>、職業体験は総合的な学習の時間の重要な取り組みのひとつとなっている。

さて、職業体験とキャリアの関係についてみると、例えば高橋（2018）は、商業高校の事例を基に、インターシップが「進路希望を具体化すること」に効果的であることや、短期間ではあるものの実際の職場や仕事に関わることが、自分の進路を考えるきっかけになっていると指摘している<sup>9</sup>。また、橋本ら（2018）は、職業体験での学びを基にした進路選択に関わる授業を行うことによって生徒の進路選択能力が向上することを明らかにするなど<sup>10</sup>、職業体験は生徒のキャリア形成に一定の効果を与えているといえる。しかし、実際の職業体験の実施状況をみると、公立中学校における職場体験の実

施状況は、9,449校中9,319校と、前年度より0.5ポイント上回り、98.6%となったのに対して、公立高等学校（全日制・定時制）における実施率は、前年度より1.1ポイント上回り84.8%となり、実施割合は若干上昇しつつも、中学よりは低い状況となっている。また、学科別集計において、「在学中に1回でも体験した生徒の割合」は、前年度より0.5ポイント上回り、全体で34.9%、普通科においては22.3%、職業に関する学科においては69.2%と学科の違いで実施に大きな差が生じていることが示された<sup>11</sup>。この点について斎藤（2016）は、高卒後に大学に進学するにしても、いずれは就職することを考えると、しっかりとした勤労観や職業意識を形成することが重要であるとしつつ、ほとんどの中学では職業体験を実施しているのに対して高校、とくに普通科の生徒の実施率が低いことを危惧している<sup>12</sup>。

また、高校時の活動において「必要な能力を身につけるのに有効な場」として校外学習（地域行事、ボランティア、インターシップ等）をあげている割合をみると、大学進学希望者は44.1%だったのに対して専門学校進学希望者は40.1%となり、高卒後の進路先の違いによっても職業体験・インターシップに対する意識の差があることがみてとれる<sup>13</sup>。つまり、高校進学後は所属学科や設置形態によって職業体験学習の取り組みに差が生じていることや、高卒後の進学先の違いが中等教育段階の職業体験学習に対する評価にも違いがあることは十分に考えられるのである。

そして、こうした職業体験を通じた職業観、勤労観の形成については、その後の社会への移行の観点からも重要といえる。たとえば、本田（2005）は、職業学科出身の生徒が「対人能力」が高いと同時に「進路不安」が低いと指摘している<sup>14</sup>。また、普通科出身の就労者は、「職業的意義」ある教育経験が乏しいまま社会に出て

いくことで、若年労働市場の問題を体現するような働き方をしている度合いが専門学科出身者に比べて大きいことや<sup>15</sup>、職業分野を意識した教育内容の設計が分野によって異なり、人文科学や社会科学という分野については、卒業後、専門的でないキャリアをたどる者が多いため「職業的意義」の水準は低いと論じている<sup>16</sup>。この本田の指摘は、仕事観や勤労観の形成には、高校の所属学科、すなわち普通科、職業科における学びの特色や大学の学問分野の影響を強く受けていることを示している。だとすれば、高校時代に形成された職業観や勤労観が、大学や専門学校進学後の学習意識にどのような影響を与えているのかを確認することは、中等教育と高等教育の接続を通じた学びの展開を検討する重要な視点となることが考えられる。

そこで本稿では、大学生、専門学校生に対して中等教育段階での職業体験学習の評価と現在の学びに関する調査を実施し、高卒後の進学先や高校所属学科による違いを明らかにしながら、職業体験学習と現在の学びに対する姿勢や意見との関連を検討することを目的とする。こうした視点を持つことは、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」ことを目指す総合的な探求の時間の学びと、高卒後の進学先との教育的な連動の観点から課題を見出す意味でも重要であると考ええる。

## 2. 研究方法

今回、本稿ではアンケート（無記名式）による量的調査を行なった。調査は2018年9月から2019年1月に実施し、サンプル数は計629名となった。内訳は、大学生448名（学部系統は経済、経営、文学、語学系）となり、学力レベルは、大手予備校が示す入学難易度レベルで35～40に位置している<sup>17</sup>。専門学校生181名（専攻は栄養系、医療福祉）となった。また、進学

先、出身学科別でみると、普通科出身の大学生（以下、大学普通）が339名、職業科出身の大学生（以下、大学職業）が109名となり、普通科出身の専門学校生（以下、専門普通）が115名、職業科出身の専門学校生（以下、専門職業）が66名である。調査実施にあたっては、対象となった大学、専門学校からの協力を得て授業内で質問紙を配布し、その場で回収をした。なお、個人が特定されることはないことや、調査の途中でも本人の自由意思で取りやめることが可能なことを伝え、論文への記載についても本人の了承を得た上で実施した。

### 3. 結果と考察

はじめに、進路先、出身学科別による職業体験学習に対する評価に差があるか検証をするために1要因の分散分析を行なった（表1）。分析の結果、「②仕事の厳しさを知った」「⑥忍耐力がついた」において大学職業が専門普通より有意に高く、「⑤その仕事に向いているとわかった」において大学普通、大学職業が専門普通により有意に高かった。その他の質問について差がみられなかった。その中で「⑦社会的マナーを学んだ」平均値が3前後（いずれの調査も4件法にて実施）となり、他より高い数値を示した。

以上のことから、社会的マナーを身に付けることに対しては進路先、所属学科の違いに関わらず評価しているが、仕事の厳しさや忍耐力の形成については、普通科出身の専門学校生はそれほど評価をしていないことがわかった。なかでも、大学職業が専門普通よりも仕事の厳しさや忍耐力に対して一定の認識をしていることは興味深い。なぜなら、職業資格を取得することを目標としている専門学校生よりも職業的レリバンスの弱い文系大学に進学した者の方が、いわゆる仕事観、勤労観に対する意識が高いとみることができるからである。

また「⑤その仕事に向いているとわかった」

ことについては、職業体験先決定の際の環境、例えば選択肢や仕事内容に大きなバラつきがあるため単純な見方はできない。しかし、大学進学者の評価が高いことは、職業体験学習の内容が大学進学行動に何らかの影響を与えていることは考えられる。

次に、進学先、所属学科別による現在の学びに対してどのような考えを持っているかについて差があるか検証するために1要因の分散分析を行なった（表2）。その結果、「①今、学習している内容は将来の就職につながるものである」「②学校のキャリア教育は将来の就職につながるものである」は、ともに専門普通、専門職業が大学普通、大学職業より有意に高かった。これについては、調査対象の大学が職業に直結した資格の取得を目指すような学びではなく、一方、専門学校は栄養や医療と職業直結型の学びであることを考えると妥当といえるが、有意差は認められるものの、大学生においても平均値3以上の数値を示しており、大学生も現在の学びが就職につながると考えていることがみてとれ、②の学校のキャリア教育と就職との関連についても同様の傾向がみられたのである。

そして、「④学校の学習と将来の就職を結びつけて考えるべきではない」は、大学普通が専門普通、専門職業より有意に高く、大学職業が専門職業より有意に高いことがわかった。大学生が専門学校生よりも、現在の学びを就職に結びつけるべきではないと考えるのは、先述同様、学びの性質からみても妥当である。しかし、「③学校の学習は将来の就職と結びつかない」と意味がない」について有意な差が認められなかったことは、数値が3前後を示していることもふまえれば、大学生も専門学校生同様、学びが将来の仕事に結びつくものでありたいと考えていると捉えることができ、大学生、とくに文系大学生の学びに対する不安が見え隠れする。

表1 職業体験学習に対する評価

	1. 大学普通		2. 大学職業		3. 専門普通		4. 専門職業		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
①就きたい仕事の知識や情報を得た	2.43	0.97	2.43	0.96	2.18	1.02	2.47	0.93	1.91	
②仕事の厳しさを知った	2.91	0.91	3.08	0.93	2.68	1.00	2.82	0.83	3.25*	2>3
③視野が広がった	2.85	0.92	2.96	0.84	2.69	1.02	2.89	0.84	1.57	
④働く意味を感じた	2.91	0.89	3.07	0.86	2.84	0.92	2.79	0.84	1.62	
⑤その仕事に向いているとわかった	2.34	0.96	2.29	0.90	1.92	0.93	2.23	0.94	5.77***	1,2>3
⑥忍耐力がついた	2.58	0.93	2.65	0.92	2.25	1.03	2.53	0.97	3.60*	2>3
⑦社会的マナーを学んだ	3.02	0.85	3.13	0.81	2.93	0.95	3.00	0.76	0.43	

\* $p < .05$  \*\*\* $p < .001$ 

表2 現在の学びについてどのように考えますか

	1. 大学普通		2. 大学職業		3. 専門普通		4. 専門職業		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
①今、学習している内容は将来の就職につながるものである	3.13	0.87	3.07	0.77	3.83	0.38	3.77	0.49	36.63***	3,4>1,2
②学校のキャリア教育は将来の就職につながるものである	3.07	0.84	3.07	0.74	3.50	0.61	3.56	0.64	14.71***	3,4>1,2
③学校の学習は将来の就職と結びつかないと意味がない	2.92	0.86	2.92	0.86	3.14	0.87	3.03	0.88	2.08	
④学校の学習と将来の就職を結びつけて考えるべきではない	2.53	0.95	2.45	0.93	2.20	0.92	2.05	0.90	7.13***	1>3,4 2>4

\*\*\* $p < .001$ 

表3 社会への移行に対する不安感

	1. 大学普通		2. 大学職業		3. 専門普通		4. 専門職業		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
社会に出るのがとても不安である	3.02	0.91	2.90	1.00	2.97	0.89	2.67	1.09	2.68*	1>4

\* $p < .05$ 

最後に、社会への移行に対する不安感を確認するために、1要因の分散分析を行なった（表3）。その結果、「社会に出るのはとても不安である」について大学普通が専門職業より有意に高いことがわかった。これをみると、職業レリバンス弱い普通科、文系大学の学びよりも、職業教育に特化する職業学科出身で、かつ職業レリバンスの強い職業資格の取得を目指す学びの方が、社会に出ることに対する不安を軽減することにつながると捉えることはできる。ただし、有意差は認められなかったものの、同じ専門学校生でも普通科出身者や、職業学科出身の大学生も数値3前後を示していることは、見過ごすことができない。

次節では、ここまでの結果を整理し考察を進めることとする。

#### 4. 総合考察

本稿では、進学先、出身学科別で中等教育段階における職業体験学習に対する評価や、高卒後の進学先での学びに対する考え、社会に移行することに対する不安感について違いがあるか検証をしてきた。その結果、次の点が明らかとなった。

1点目は、職業体験学習に対する評価をみると、社会的マナーを身に付けることについては属性に関わらず評価が高かったが、仕事の厳しさや忍耐力の形成といった働くことに対する意



識づけの面においては、普通科出身の専門学校生より職業学科出身の大学生の方が有意に高かったことである。

2点目は、現在の学びに対する考えをみると、出身学科よりも進学先の違いが影響しており、大学よりも専門学校の方が、学びと将来の就職がつながっていると考える傾向はあり、その中で文系大学生には職業レリバンスの弱さに対する不安がある様子もみてとれた。

3点目は、社会に移行することに対する不安については、普通科出身の大学生が職業学科出身の専門学校生よりも有意に高く、高校、大学を通じて職業レリバンスの強い学びが不安を軽減することにつながっていたのである。

これらをふまえて考察を進めたい。全体を通していえることは、総合的な学習の時間の中で行われ、同じように生きていく上で重要な勤労観や職業観を養う職業体験学習の取組みであっても、普通科、職業学科や進路先によって評価も違い、その後の進路先における学びに対する考え方にも影響を及ぼすことがうかがえたことである。

例えば、職業体験学習において、職業レリバンスの強い専門学校生よりも、職業レリバンスの弱い大学生の方が、仕事の厳しさや忍耐力の形成に対する評価が高いとしたのは、職業レリバンスの強さの違いがある専門学校、大学という進路先よりも、むしろ、普通科、職業学科という高校時代、在学していた学校の学びの特色の違いが影響していることがみられことも特徴のひとつといえる。これらは、冒頭の高橋の指摘にあったように職業学科のインターシップが進路を具体化することに効果を上げていることや、橋本らの職業体験での学びが生徒の進路選択能力が向上するといった指摘を支持するものである。

そして、高校、専門学校を通して職業レリバンスの強い学びの中にいる職業学科出身の専門

学校生が普通科出身の文系大学生よりも社会に出ることの不安が少ないことは、本田の職業学科出身の「進路不安」が低いことや、文系大学の職業レリバンスの弱さや、普通科出身者の職業的意義に関する教育経験の乏しさが影響するといった指摘と符合するものといえる。

このように本稿の結果は、先行研究で示されてきた指摘を補強するものであるが、注視すべき点は、属性にかかわらず、「現在の学習が将来の就職に結びつかないと意味がない」について有意差は認められず、かつ数値が3前後を示したことである。つまり、高校時代や高卒後の学びにおける職業レリバンスの強さに関わらず、大学生、専門学校生は学びと就職の結びつきを意識していると考えられるのである。そして、今回、調査対象となった大学は入試偏差値でみると下位に位置しており、質問紙では出身高校名や学力レベルに関する項目は無いものの普通科でも進路多様校とされる高校出身の者が多いと推察され<sup>18</sup>、普通科でも学力に不安がある者たちが抱く意識と捉えることができる。すなわち、学力不安を抱える者たちは、職業体験学習のような勤労観や職業観を意識づける学びにおいては高校の出身学科に違いがみられるものの、高卒後の進路先の学びにおいては属性に関わらず将来の就職との結びつきを重視しているのである。

しかし、普通科出身の文系大学生は職業科出身の専門学校生に比べて社会への移行不安を抱えている一方で、同じ文系大学に進学した職業学科出身者は、職業体験学習を通じて仕事の厳しさや忍耐力が形成されたと評価していることをみると、やはり、普通科、職業学科、それぞれ異なる学びの中で形成される学習意識の違いが、その後の進路選択や社会への移行に対する考えにも影響を及ぼしていることがみてとれるのである。とりわけ、職業学科の学びを経験した者は、その後、一般的に職業レリバンスの弱

い学びとされる文系大学へ進学しても、高校時代において形成された職業観や勤労観を持ちながら学ぶことで、社会への移行不安を普通科出身よりも少ないことを示していたのである。

これらの指摘は、こうした高校の出身者が総合的な学習の時間を通じて形成される学習意識、とりわけ生きていく上で重要な「仕事に就く」という視点から高卒後の学びとのつながりや、社会への移行に対する考えの形成プロセスをどのように構築すればよいのかを考えさせる契機となる。そして得られた知見は、「自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」ことを目指す総合的な探究の時間の学びと、高卒後の進学先との教育的な連動の観点からの課題提示という点で非常に意義があるといえる。

2019年5月、教育再生実行会議は第11次提言において高等学校改革のひとつとして「普通科の各学校が、教育理念に基づき選択可能な学習の方向性に基づいた類型の枠組みを示すこととする」と述べ、普通科が、これまでの一斉的・画一的な学びから特色ある学びへの転換を図ることについて言及をしている<sup>19</sup>。普通科でも進路多様校に位置する高校は、卒業後、大学、短期大学、専門学校への進学、就職と多様な進路を選択する者が多い中で、就職であれば直ちに、進学でもそれぞれがどのような進路を辿るとしても、かれらが社会への移行を果たすときに、できるだけ不安が少ない状況でスムーズに移行できるような仕組みを構築しなくてはならない。そのためには、進学指導を優先としてきた進路指導の考えや、そもそもの学びのカリキュラムを抜本的に見直す時期がきていると考える必要があるのではないだろうか。今回の教育再生実行会議の提言を足掛かりに、それぞれの学校が特色ある学びへの転換を図っていくことが望まれる。

間もなく高校において総合的な学習の時間

が、総合的な探究の時間に関わり実施される。先述の「総合的な探究の時間は、自己の在り方生き方と一体的で不可分な課題を自ら発見し、解決していくような学びを展開していく」という記述を達成するためには、冒頭の「質の高い探究」の必要が示されており、その中の1つに「探究が自律的に行われるということである。具体的には、①自分にとって関わりが深い課題になる（自己課題）、②探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）、③得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）などの姿で捉えることができる」とされている。変化の激しい社会を自分の力で乗り切り、切り拓いていくためには、普通科、職業学科といった違いや、その後の進路選択の違いに関わらず、生涯学び続ける力を形成する必要がある。総合的な探究の時間は、その力を養う場として大きな役割を果たすことが求められているといえよう。

## 5. 今後の課題

以上のように本稿の結果は、現在、高校においては総合的な学習の時間から総合的な探究の時間へ順次移行している中で、今後、探究の時間が担う役割を示した点で意義があるが、当然ながら課題もある。

まず、今回は職業体験学習を事例に取り上げたが、総合的な学習（探究）の時間の内容は多岐にわたるため、さらに多くの取り組みを事例にしつつ、検討を重ねる必要がある。また、今回は、中等教育全体に関わるものであったが、今後、中学では総合的な学習の時間、高校では総合的な探究の時間と明確に分かれることを考えると、それぞれを対象に詳細な調査を実施する必要がある。そして、本調査では中等教育と大学、専門学校の教育的な接続という点での分析は大枠の視点に留まるものと言わざるをえない。今後は、詳細な質問項目を通じた検討が求

められる。これらの点は次回の課題としたい。

#### 引用文献

- 1 文部科学省1996「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (第一次答申)」中央教育審議会
- 2 文部科学省2010「新学習指導要領・生きる力」
- 3 文部科学省2009「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編」海文堂
- 4 文部科学省2018「高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編」p.8
- 5 文部科学省2018 前掲書 p.9
- 6 文部科学省2018 前掲書 p.73
- 7 文部科学省2018 前掲書 p.74
- 8 国立教育政策研究所2019「平成29年度職場体験・インターシップ実施状況等結果 (概要)」<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/i-ship/h29i-ship.pdf> : 2019年9月22日アクセス
- 9 高橋秀幸2013「インターシップと販売実習に関する比較研究—商業高校の在校生調査から—」『インターンシップ研究年報16』pp.1-10
- 10 橋本快 橋本治2018「希望レベル調査を基にした進路選択能力の育成—キャリア教育としての「職場体験活動」と連動させた授業実践を通して—」『岐阜大学教育学部研究報告67』pp.159-168
- 11 国立教育政策研究所2019 前掲書
- 12 斎藤剛史2016「中学校で当たり前の職場体験 高校普通科には課題も—斎藤剛史—」『ベネッセ情報教育サイト』Benesse <http://benesse.jp/kyouiku/201601/20160107-1.html> : 2019年9月23日アクセス
- 13 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査2018「第8回高校生と保護者の進路に関する意識調査2017年」  
[http://souken.shingakunet.com/research/2017\\_hogosya2.pdf](http://souken.shingakunet.com/research/2017_hogosya2.pdf) : 2019年9月10日アクセス
- 14 本田由紀2005『多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版 pp.148-149
- 15 本田由紀2009『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房 pp.112-113
- 16 本田由紀2009『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房 pp.112-120
- 17 河合塾 kei-Net 2018「入試難易予想ランキング表」  
(2019年2月10日取得 <http://www.keinet.ne.jp/rank/>)
- 18 従来普通科における非進学校を指し (荻谷剛彦・粒来香1997「進路未定の構造—高卒進路未定者の折出メカニズムに関する実証的研究—」『東京大学大学院教育学研究紀要第37巻』)  
1990年代後半以降の推薦入試の拡大と大学入試の易化、多様化により進学実績を上げた職業学科を含めた高校を現在では進路多様校としている (片瀬一男2005「進路多様校の成立—仙台圏の公立高校における進路状況の変容—」『人間情報学研究第10巻』)  
中村高康2010『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房)
- 19 内閣府教育再生実行会議「技術の進展に応じた教育の革新, 新時代に対応した高等学校改革について (第十一次提言)」  
[https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai11\\_teigen\\_1.pdf](https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaisei/pdf/dai11_teigen_1.pdf) : 2019年6月30日アクセス

(はせがわ まこと 神戸松蔭女子学院大学)